

## 苦難の道

岐阜県 白木 美佐子

渡満から敗戦へ

昭和十九年の夏も盛りのことでした。県庁へ出かけた夫が帰ってくるといきなり「満州へ行こうと思うーハルビン訓練所の教師が一人足りないから行ってくれないかという話なんだ。」あまりに突然のことで私は何と答えたか覚えていません。もちろん家族も一緒にこのことで、跡とり娘である私と夫が、そんな遠い所へなど、両親がどんなに驚くことでしょう。しかし農学校卒業でもあり、若い時は教師になるのが夢だったという夫にとって、これは又とない機会ではないか、しかも「お国のために」という素晴らしい言葉の前に、若い夫の心が動いたのももっともなことと思われず。改まって両親の前にすべてを話した時、父は黙って聞いているだけでした。明治生まれの父にとって雪と氷

の満州は私たちが思うより以上に、遠い地の果てのよりに思えたのかも知れません。若いといってももう六十歳、次の妹は名古屋に嫁ぎ、下の妹は女学校を出たばかり、こんな家族を置いて私は家を離れていいものか、両親の驚きや嘆きを思うと私の心はゆれ動くのでした。それなら、「あなた一人で行って」とはとても夫には言えませんでした。二日ほど経って父は「男がいったん決心したことだ。もう止めても無駄だろう。これもお国のためだから」とポツリと一言言いました。父がどんな思いで許してくれたことか。この言葉に私はホッとすると同時に喜びと悲しみの複雑な思いで一杯でした。

夫は勇んで九月内原の訓練所へ、そしてその年の十二月の末にハルビンへと出発しました。二十年に入ると戦局は日増しにきびしくなりB29の襲撃も激しくなっております。

家族で何度か話し合った末に、小学校へ入ったばかりの長女は母にとてもなついていましたので、両親の寂しさを思っただけでそのまま預けることにしました。

一月の末に、夫はハルビンから私たちを迎えに来ました。いよいよ渡満の日です「外はどんなに寒くても、窓は二重窓だし、ペチカを焚けば家の中は浴衣一枚でいくらい温かいのだから。」と両親を安心させるための夫の言葉も、恐らく両親の耳には入っていないかたかと思えます。二月十一日朝、二歳の長男を背に、五歳の次女の手を引いて、私たち四人は両親はじめ二人の妹、親戚の者に送られて蛟阜駅を出発しました。「おじいちゃん、お土産買ってくるからね。」まるで近くへ行くようなあどけない長男の言葉が又も父の心を打ったようです。

下関で一泊、関釜連絡船の息苦しい八時間を経て釜山に着いたのは夕方でした。それから緑の少ない朝鮮半島を縦断して夜中に国境を越え、奉天、新京、ハルビンへと、生まれて初めての長い長い旅でした。

ハルビン市郊外の新香坊駅に降りた時、見渡す限り一面真っ白な雪に覆われた果てしない風景にただ茫然としました。迎えに来て下さった森先生たちと中隊へ伺いました。兵舎のように建ち並ぶ建物の一部にハル

ビン訓練所蛟阜中隊がありました。ここで田中中隊長、棚橋先生、八木先生にお目にかかり、まだ若いけれど真っ黒な顔をして防寒服に身を包み、きびきびした生徒さん方の姿は大変頼もしく見えました。早速白米の御飯と白菜に豚肉をたっぷり入れた御馳走を頂きましたが、そのころ内地では白い御飯などとても口に出来ない状態でしたので、長旅に疲れた私たちにとって、どんなにおいしかったことでしょう。

中隊から少し離れたところに私たちの宿舎を頂きましたが、遠い異国のように思っていたハルビンも周りは全部日本人ばかりで、本当に心強く、ペチカを焚いた部屋の中は温かくて、夫が朝中隊へと出かけた後は、子供と二人だけで無事に着いたわずかの荷物を取片付けた後はまるで嘘のような静かな毎日でした。水は極度に少なく思うように使えないことだけが、ただ一つの不便でした。変わった土地へ来たせいでしょうか、次女と長男は麻疹にかかる、百日咳にかかる。また熱を出すというように代わる代わる病気をして私の心を痛めさせました。そのうちに近所の方ともおなじみに

なり、子供たちにもお友達が出来、兎を飼ったり鶏を飼うなどして子供たちの笑い声の絶え間のない日が続きました。

段々に内地の厳しい状態がこちらにも伝わって来ましたが、五月の末突然母が倒れたという知らせが届き、私はハッと胸をつかれました。すぐ飛んで帰ることも出来ないこんな遠いところへ来てしまったことが、両親にも妹にも済まない気持ちで一杯になり、流れる涙をどうすることも出来ません。その後の母の病状も分からぬまま、その便りを最後に内地との音信ももう出来なくなり、私の不安は募るのみでした。

ハルビンでも私たち婦人も救急法の練習や銃剣術のけいこが始まりましたが、子供も私も近くの方と近付きになるきっかけが出来て、かえって喜んでいるようなまだまだ穏やかな明け暮れでした。でもそんな日々は長くは続かず、六月から七月にかけて、訓練所の先生や年長の訓練生の方が次々応召して行かれ、硫黄島が玉砕した、沖繩がやられた、次は本土決戦といううわさが耳に入ってきて来ました。岐阜中隊の八木、森両先

生がそろって応召のため出立されたのもその時でした。そのころふとした私の不注意から次女が急性腸炎を起こし、一夜の中にすっかり憔悴してしまいました。お医者様の手厚い手当てや、近所の方のおかげで命だけは助けていただきましたが、その真っ只中に、夫に召集令状が届きました。三日後、やつれ果てた次女に心を残して南満磐石へと出立しました。夫が応召してから私はお隣の朝谷（ハルビン訓練所病院長）さんと共同生活を始めました。御主人は一月ぐらい前に出征され、奥さんは年も私と同じ、どちらも子供二人抱えていたので子供たちのためにも一緒に暮らすことになりました。満州の生活に慣れない私にとって、朝谷さんが何よりの頼りであり、罪一つで行き来できる住宅も幸いでした。一時はどうなることかと思った次女もようやく元気をとり戻し、二家族が寂しいながらも仲良く暮らしておりました。八月八日の未明突如空襲警報が不気味に鳴りひびいた。思い返せばその警報のひびきこそその後の恐怖と混乱の生活への開幕のベルではなかったでしょうか。

北、西、東の国境からソ連軍が戦車をつらねてやってくるといううわさに、心も落ち着かないところに岐阜中隊に只一人残っていたられた棚橋先生と五人の生徒が新京へ応召のため出立された。

八日の襲撃をうけた奥地からの人たちが続々逃れて来て、訓練所の建物が一時の收容所となった。匪賊が押し寄せてくる。満人が暴動を起こして皆殺しになった。政府の主だった人はソ連に拉致され銃殺されたと身ぶるいするようなうわさが飛び交い生きた心地もしなかった。間もなくソ連の大軍がハルビンに到達する。訓練所本部では婦女子を引き連れて南下するか、ここに踏み止まるか決まらない様子で、女ばかりの私たちには本部の意向も、しかと分からなかったが、最後の覚悟を決める時は刻々近づいてきました。不安におののくうちに迎えた八月十五日、重大放送があるというので、ラジオのある朝谷さんの家に集まった。ソ連への宣戦布告の放送とのみ思っていた私たちの耳に、雑音が入って聞き取り難いうちに「忍び難きを忍び…」という陛下のお声が入って来た。それがはっきりと敗

戦と知った時、一瞬異様な空気が流れ、あちらでもこちらでも声にならない泣き声が起こり、最後まで聞くことも出来なかった。最後の召集で新京へ行かれた棚橋先生方が帰隊された。鉄道ももう日本の手を離れたということでした。南満へ征つた夫は…。

満人の暴動のうわさはますます高くなる。手近の品だけ残して後は床下にかくしたり防空壕に入れたりした。そのころになるとソ連兵が各家に押し入り、土足のままで上がって家中を引っかき回し、時計、ラジオ、指輪などの貴重品から、衣類など持ち去ってゆく。私と朝谷さんは、おびえる子供を両腕に抱えてソ連兵の立ち去るのを待つばかりでした。多くの避難民が後から後から流れ込む。最後の日も遠くないと思った私は、内地からの手紙や、家族の写真を一まとめにして火の中へ入れた。メラメラと燃える長女の晴れの入学式の写真を見つめながら、この遠い北の果てで夫とも別れ別れになった今、明日のことさえおぼつかない私たちだけとお前だけは生きていておくれ。七月九日岐阜市に空襲のあったこともラジオで知っているが、家族の

安否はもう確かめようもない。長女よ、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に無事に生き延びていておくれ、今はただ心の中で祈るよりすべもなかった。

岐阜中隊の最後のお別れの宴が開かれた。榎橋先生と御家族、私たち親子と残った生徒さんたちとで出来るだけの御馳走をしてひとときを過ごした。男の人たちはいつソ連へ拉致されるか分からない。お互いの無事を祈り合ったが、国家も警察力もない私たちは自分の力で生き延びねばならなかった。生徒さん方が力一杯声をはり上げて義勇隊の歌を歌う声がむなしくひびき、涙が止めどなく流れるのをどうすることも出来なかった。私たちはいつか顔を洗ったり髪を梳くことも忘れ、カーキ色のズボンをはいて夜もそのままの姿で横になる。真夏なのに子供たちには冬服を重ねて私の両脇にころがすように寝かせた。

それはどこだったろうか。だれが知らせてくれたのかも分からない。夫が戦死をしたという報を聞いた。ああとうとう、暗い闇の中に引き込まれるような、体中の血が一瞬凍ったような思いだけが頭に残って…。

ふと気付くとそれは夢だった。暁の夢は正夢という。夫は戦死したのであるうか。匪賊のために命を落としたのか、魂だけが私のもとへ知らせてくれたに違いない。その日一日食事ものを通らない。

ソ連兵は毎日やって来る。始めは貴重品や男物の洋服を探したが、このころは手当たり次第何でも押し入れから引っ張り出しては歓声をあげて帰ってゆく。それでも品物さえ手に入れば喜んで引き上げてゆくのはまだまだ良い方だった。嫌な夢を見て中一日おいた早朝、一人の生徒がドアを叩いた。「先生が中隊へ帰られました。着替えを持ってすぐ来て下さい。」と、今朝中隊にやっと辿りついたとのこと、この二、三日泣くことも笑うことも忘れていた私に、やっと人間らしい感情が蘇って、涙がどっとあふれて来た。二人の子を連れて中隊まで駆けつけると、夫も私の来るのが待ち切れず、入れ違いに家へ向かったという。飛ぶように家へ引き返すと家の中にひとり座って待っていた人、髭ぼうぼうの真っ黒な顔、やせて三角にとがったあご、まるで別人のような夫がぼろぼろの満服を着て目だけ

が泣くように笑っていた。「お父さん」子供と一緒に思わずとびついて後は言葉もない。夢は逆夢だったのだ。無事を喜ぶひまもなくまたソ連兵がやってくる。どうして盤石から帰ることが出来たのか、その話をきいたのはずっと後になってからだ。

その日午後三時、十七歳以上五十歳以下の男子集合との命令が出た。幸か不幸か夫の名はまだ名簿にないので、今回は残ることになったが、若い生徒さんたちと共に生活するために髭だけそると中隊の方へ行ってしまった。

男子のほとんどが東へ連れて行かれたことは、付近の満人にすぐ知れたらしい。女子供だけの起居では危ないというので、早目に夕食をすますと朝谷さんと一緒に中隊の宿舎へと行った。その夜近くの満人部落で結婚式があったとかで、耳慣れない音楽がきこえて来たが、それが祖国を失った私たちを冷笑している祝宴の音楽のように不気味にきこえ、一晚中眠ることが出来なかった。

翌日は鋤や鎌を持った満人が襲って来た。訓練所の

倉庫に食糧や武器がたくさんあることを知って来たのだ。若い生徒たちが木銃で構えているところへ、ソ連兵が駆け付けて大事にはならなかったが、それからは毎日のように襲撃はくり返された。奥地からの難民たちも倉庫に食糧のあるのを知って大八車に砂糖や米などを積み込んで堂々と持ち去って行ったとか、秩序も何もない暴民のようであった。

その夜も早目に夕食を終え、朝谷さんと私は中隊へ向かった。狭い部屋の一角に子供たちを寝かせたところへ、入口からソ連兵が二人ずかずかと入って来た。

ハッとして立ち上がった時、二人で何やらささやきながら不気味な笑いを浮かべた。これは、と私は体中の血が逆流して気が遠くなるような気がしたが、「朝谷さん危ない、逃げましょう」ととっさに二人は目で合図して、長男を抱き上げ、入口に立ちはだかっているソ連兵に近寄ると、抱いていた長男を思い切り投げつけた。ワワと泣き出す長男、ソ連兵がひるんだすきに次女の手を引っ張って朝谷さんと狭い入口を必死で通りぬけ生徒さんたちがいる広間に飛び込んだ。かねて

ソ連兵は子供には危害を加えないときいていたのが  
フツと頭にひらめいたのだった。ソ連兵は泣き叫ぶ長  
男を生徒さんの手に託すと苦笑いしながら引き上げて  
行った。夕暮れの色濃い広場の向こうに兵の馬の蹄の  
音が消えて行ったが、まだ私の胸は早鐘のように打ち  
続けていた。ああ助かったと思うと同時にこの先二人  
の子を抱えて、自分の身さえ守ることが出来るかどう  
か、おびえて泣きじゃくり続ける二人の子を両腕に抱  
きかかえたままその場にうずくまってしまった。

#### 収容所の生活

「一時間以内に荷物を持って集まれ」連れ去られた  
男子部隊が意外に早く帰って来られたと思う間もなく、  
家族たちに集合命令が出た。訓練所全体が避難民収容  
所となるらしい。私たちはその夜から電灯もない広間  
にアンペラを敷いたところに多数詰め込まれた。翌朝  
は荷物の整理が命ぜられる。ほとんどの荷物は放り出  
してしまい、お金は必要以上に持ってはいけない。区  
域外へ勝手に出てはいけない。背いた者は銃殺と脅か  
された。十七歳以下の生徒も老人も男子という男子全

員が牡丹江に向けて出立したのはその二、三日後のこ  
と、夫もその中に交って行つたらしい。後は五、六人  
の先生が世話役に残って全くの女子供ばかりとなり、  
続いて本格的に集団生活が始まった。東の空がようや  
く白み始める五時半に起床の合図、三十分の中に身仕  
度をして広場に集まるとそこで状況の説明と簡単な訓  
辞があった。その後食前作業が十時半まで、朝食が済  
むと十一時半から五時半の夕食まで又作業、その後は  
電灯のない部屋にただ眠るだけ、体は綿のように疲れ  
ていても心は遠くふる里へ、又夫の身の上が気付かわ  
れて眠るどころではない。夫が牡丹江へ行く前に会う  
こともかなわず、棚橋先生の奥様や朝谷さんともいつ  
か離ればなれになってしまった。

作業はいろいろあった。夏の間生徒さんたちが作っ  
た馬鈴薯、大豆や野菜などの収穫、訓練所の周りを囲  
んでいた榆の立木を伐って燃料作り、人の丈ほどもあ  
る草の刈取りなどあったが幼い子持ちの私には、炭団  
作りしか出来ない。今まで放ってあった古い石炭屑を  
掘り起こして泥と水をまぜて炭団に作る。九月も末に

なるともう風は冷たく水仕事の手は荒れた。落ち着かぬ団体生活におびえてる子供たちは私の手を離さない。子供もかわいそうで私まで泣き出したい心地を抑えるのが精一杯だった。団体生活の組替えで宿舍が変わり、今まで独身寮だった狭い三疊の部屋に子供六人を含む四家族十一人が詰め込まれた。お互いに荷物は少なくなっていたが、この人数では押し入れに寝たりする始末だった。折角収穫した大豆や馬鈴薯などは倉庫に入れたころソ連兵がやって来てトラックに満載して行ってしまう。初めは高粱のおにぎりだったのが、いつかお粥だけとなり、おやつも無い。收容所のほかには満人がパンやまんとうなど売っていたらしいが、買うことは止められていた。

作業の合間に清掃作業もあって宿舍の外外は塵一つないようになっていたが、そのころになると日本人の間にも物を盗まれたりすることが持ち上がり、作業や集合の時には舎内当番が残ることになった。朝の便器の取り片付け（夜は室外のトイレに行くのは危険なので舎内に大きな桶が三つ四つ置かれていた）舎内の掃

除、水汲みなどがその仕事であった。井戸が少なく水汲みの時は長い列を作って待ち、重い水桶をかついでくるのでしたが、私は喜んで舎内当番の日を待った。少しでもひまを見付けて身の回りの仕事が出来、間もなくやって来る冬に備えて、子供たちの冬仕度の不安を少しでも少なく出来た。私の着物を冬オーバーと取替えて子供物に仕立てたり、防寒帽や手袋、防寒靴など教えてもらって曲がりなりに出来、又その日は一日子供たちと一緒に過ごす時間があったのが何よりだった。

一か月もたたぬ中に、職員の家族の中から子供さんが麻疹や百日咳、ジフテリアにかかり、小さい赤ちゃんは栄養失調のため、十分な手当てが受けられず亡くなってゆかれた。余程の病人でない限り白米のお粥がもらえない。食べられない高粱のお粥でほとんどの子供さんが下痢に悩まされた。私の二人の子供も同様に下痢が続けている。白米を炊くくらいのお米はリュックの底に持っていても集団生活では勝手に作ることも出来ない。いつか朝谷さんの坊やも亡くなられ

たとうわきにきいた。病院の裏には亡くなられた子供さんの墓が毎日増えて行った。始めのうちは木箱に収めて葬られたが、増える一方なのでただ土を掘って埋めるだけということであった。

十月に入ると牡丹江へ連れ去られた男子部隊が無事帰って来るといいうわさが入った。話をきいただけで胸が熱くなり、ポロポロと涙が頬をつたう。家族たちは一様に手を取り合って喜んだ。男子部隊は何組にも別れて帰りひとまず別の宿舎に入れられた。わずかの間に、自分たちの家族の悲惨な様子に驚き、どの先生方も子供たちのために白い御飯を飯ごうに入れ、パンやまんじゅうを運んで来られた。間もなく夫の部隊も帰り、帰るとすぐにおいしいお菓子やパンを運んで下さった。何日ぶりに子供の笑顔を見たことか、作業作業に追われて十分にかまってももらえない母親と見知らぬ人との生活で痛めつけられていた子供の心が少しずつ溶けて行ったのであろう。パンを手にして私を見上げながらニコニコしている子供を眺め、うれし涙に濡れた顔を私はそむけた。

そのころから作業や規則がゆるやかになって来た。先生方のお骨折りで子供のいる家庭から順に元の宿舎へ戻ることになった。けれども一軒の家に何家族も同居するのであった。始め慣れない方と四家族の同居であったが、その後で前からお知り合いの本部の瀧本先生の家に同居させていただくことになった。一族に一部屋ずつ与えられたことが、うれしくて自由といふものの有り難さをしみじみと味わった。お金も物もほとんど失くしていたが、食料だけは配給してもらえた。高粱を炊くことも慣れぬうちは固い御飯が出来て困ったけれど、夫の方が私より上手に炊いてかえて私が教えてもらう始末だった。

#### 關病の冬

満州の冬は駆け足でやってくる。そのころになると収容所のあちこちで熱病が次々にはやり始めた。訓練所の家族の中でも、あの方も、あその先生も、次々に病気になるという様子だった。十二月の始めハルビン市中の生徒のところへ連絡に行き、四、五日たつて帰って来た夫が、「頭が痛い、やられたらし

い。」と言ふなり床に就いた。すぐ病院の先生にお願いして葡萄糖の注射をして頂き、先生は毎日回って来て下さったが、熱は四十度を下がらず、一週間ぐらい過ぎるとついに脳症を起こしてうわ言を口走るようになった。田中先生！田中先生と中隊長の御名前を呼ぶ声だけ、はつきり聞き取ることが出来た。

子供たちもよく眠っている夜更け、夫の水枕を取替えるため音をしのばせて水を割る。夫はこちらへ腫を向けているけれど、力なく私のことも分かっているのかどうか。思えばその夜は十二月ももう三十一日、内地はどうなっていることやら、家は焼かれたと思うが家族たちはきつとどこかに生きていてくれるだろう。両親も妹も長女もどうぞ無事でと一心に心の中で手を合わせた。病院は三日間お休みだったが、二日の朝夫の様子が気にかかってたまらないので、無駄とは思いつつ病院へ走った。やはり先生はお留守だったが、折よくお顔を知っている鈴木看護婦さんが通りかかられたので、すぐる思いでお願いと、では注射に行きましようと言って下さった時のうれしかったこと。病

院から急いで帰る途中、小さな子供を抱いた若い女の人が病院はどこかときかれる。見るともうその子は冷たくなっている。片手にシャベルを持って病院の裏へ埋めるために来られたらしい。あまりの悲惨さに私は顔を覆いたくなった。

お隣の瀧本先生が二日前から発熱された。そのほかに訓練所の先生が次々亡くなられたという話が耳に入ってくる。夫の枕元に座って窓の外の雪を何気無く見ていたら、すぐ裏の家から先生の御遺骸を運び出しているらしい三、四人の生徒の姿が目映った。岐阜中隊の若い先生は応召して行かれたきり、中隊長は奉天に、棚橋先生もハルビン市中におられる。牡丹江から帰って以来、元の生徒さん方は今どこにいられるのか私には分からない。夫に万一の事があつた時、一体私はどうしたらいいのでしょうか。暗い思いだけが胸をつく。まだ集団生活に入る前、ソ連兵の暴行の激しい時、「死ぬ時は四人一緒だよ」と静かに言った夫の言葉を今私は思い出す。お父さん私たちを残して死んで駄目よ、どんなことがあってもあなただけはどうぞ

生きて下さいね。声にならない声をふり絞って心の中に叫び続けた。

祈りが通じたのか、幸いに二か月もかかって夫はやっと回復の兆を見せはじめた。意識が戻りつつあった一月の末近く次女が発熱、続いて二日後に私も発熱した。「お母ちゃん」熱に苦しむ次女の声があんがんと私の頭にひびく、のどが渴いて水が欲しかったが、医師は許して下さらない。「子供が二人いるんじゃないか、子供のために我慢するんだ。」叱りつけるような言葉をかすかに覚えていた。頭が割れる様に痛んでボーッとした意識の底に、子供子供と思いつつ、それでも水、水と叫び続けていたような気がして、その後は何も覚えていない。気がついたのは二月の八日だった。子供は、二人の子供は私の傍でおとなしく遊んでいた。ああやると助かったのだ。枕を並べて寝ている病人二人と、まだ治ったばかりの夫と長男は瀧本さんの奥さんが見て下さったのだそうだ。私は多分もう駄目だろうという医師の言葉はずっと後に奥さんから聞いた。瀧本先生が私のために、人參を手に入れてすり

卸して食べさせて下さったそう。そう言えば夢のような意識のなかに、大変おいしい物を舌の上に味わったような思いがあったのはその時であつたらうか。瀧本先生御夫婦には何と感謝していいかその言葉さえ見付からない。何もかも失ってしまったけれど親子四人命長らえて冬を越すことの出来たことは何という幸運であつたことか。

#### 引揚げの日まで

長い冬が過ぎて春が少し近づいて来た。熱病も次第に落ち着いて来たらしく、先生方も次々と元気になる。今まで死んだようだった収容所全体がにわかに活気に満ちて、秩序も次第に元に戻って来た。若い元気な男子は技術を持つ人はそれを生かし、それぞれに職を求めてハルビン市中へ香坊へと出かけられ、女の人でも身軽な人は満人の家に女中として住み込み入り、又香坊から煙草やお菓子、食料品などを仕入れて、収容所のバザールで売られた。だれもが生活費と、帰国の旅費に備えて懸命であつた。熱病の後で私は心臓が弱って、寝たり起きたりの明け暮れで、ほかの人

のように農耕の手伝いに出てお金を稼ぐことなど思いもよらなかつた。夫は元のハルビン訓練所の生徒のほかに奥地からようやくここに辿り着いたほかの訓練所の生徒たちの世話をするため毎日本部へ出かけていた。敗戦以来の苦しいなかをやっとここまで生きぬいて来た生徒のなかには、本来の純真な姿を見失った生徒もいたらしく香坊の警察に呼ばれる生徒も度々あったらしく、夫がもらい下げに出かけたことも二度や三度ではなかつた。ある時電柱を切り倒して満人に売り払ったのが見付けられ、責任者を出せと嚴重な抗議に、夫は早朝出かけたまま、夕方近くまで帰りはなく、私の不安は募るばかり、問答無用と銃殺されたり、拉致されたまま行方不明となることが少しも不思議でない時に、夫の帰りは一秒でも早くと待たれた。やっと瀧本先生が「今迎えに行ったから心配しないで」と伝えて下さった時はあたりはすっかり暗くなっていた。夫は通訳の人と二人で成高子の警察隊へ行ったところ、最高責任者を連れてこいというこで、夫は人質として留置場に入れられたそうだ。帰った夫はさすがに気味

が悪かったと笑いながら話してくれた。ハルビン市から使役の命が来ると収容所の若い人たちがかりだされた。三度目かに訓練生が大勢行くこととなり、夫は隊長として行くことになった。井上所長が、「あなたは家族もあることだし」と引き留めて下さったそうだが訓練生が多く行くため夫は自分から進んで引き受けたという。今まで二度ともに途中で脱走する人があつたそうだが、今回は夫の言うことに必ず従ってもらいたいと固く約束して出かけ、訓練生以外の人も精一杯仕事をしたそうで、中共軍の将校が気を良くして一週間で解放されたとのこと、一人の脱走者もなく全員無事に帰って来た。使役に対する幾らかの現金も手に入り、夫は豚肉や子供へのお菓子などたくさん買って帰り、瀧本さんへもお分けして共に無事を喜んだ。

小学校の先生や学童も収容所には多くいたので四月から小学校が開かれていた。教科書とて無く、お話をきいたり歌を歌ったりするだけで、雨が降れば天井から雨もりのするような、名ばかりの学校であつたが次女は生き生きと顔を輝かせて通っていた。

夫が使役から帰って四日後に収容所全体の運動会があった。学童ばかりでなく、作業も休みなので収容所全体がお祭りのような賑やかさだった。各区対抗の競技あり、お国自慢の歌と踊りがあるなど日ごろの憂さがどこかへ飛び去ったほどに、大盛会であった。夫は満人の警察官と得意の二百メートル競争に出た。かつて明治神宮の競技大会に出場したこともあるという婦人もおられたそう。

家の周りが縁にすっぽりと包まれたころから内地へ帰るうわさが日一日と高くなり、そのころになると満人がよく出入りした。衣類など少しでも多く買いたいと毎日のようにやって来る。

母が心をこめて作ってくれたまだ袖も通していなくて最後まで大切にしていた着物も、ついに手放すことにした。思いがけない大金を手にして喜んでいる私に、満人は次女を指して売らないかと言う。「不振不振」(駄目々々)と言うなり私は次女を抱きしめた。その後もなんどとなく訪れては次女と言うけれど、私はいつも強く首をふるだけだった。学校からの帰りも

しや攫われはしまいかとはらはらしたのもそのころだった。

今日か明日かと待ち望んだ引揚げの命令は八月が終わっても無かった。九月になって三日目に待ちかねた命令が出た。夜おそくまでおにぎりを作ったり、お米を炒ったり、荷物をまとめているうちに心はいつかふる里へ飛んで行く。

四日の朝ようやく東の空がしらむころから、リュックを背に、その上に毛布やふとんを積み重ね、両手に出来るだけの荷を持った人々が、収容所の広場に集まって来た。中央に荷物を積み、回りに女子供、一番前側に男の人が乗り込んだ馬車がゆるゆるとハルビン駅目指して進んでゆく。さようならハルビン初めての敗戦の苦しみを味わったハルビンの宿舎、もう二度と来ることはないと思いつつ、別れを告げた。

#### 帰郷

九月五日早朝貨車に詰め込まれたが座ったらそのまま身動きも出来ない。一か月余りの日がかかって佐世保に上陸出来たのはもう秋風が立つ十月四日だった。

錦州からコロ島そして乗船前も、佐世保に着いてからもDDTの散布や予防注射の度ごとに、長男は嫌がって泣きわめいた。七日早朝郷里へ向かうため佐世保から汽車に乗る時、「あつ天井がある汽車」と次女は声を上げて喜んだ。一年余り前内地で乗った汽車を忘れてしまったらしい次女の、無蓋車に詰め込まれた長い旅がどんなにかつらかったことかと改めて思った。

佐世保で実家のある岐阜市のほとんどが焦土となったことも知ったがともかく岐阜へと向かう。焼跡の近くに昔の知った方を訪ね、家族が名古屋の妹の所に立退いていることをきいたが、一番気がかりだった母も、不自由ながら今は元気で、父も妹も長女も皆無事と書いた時の喜びは、何とたとえたらよいか分からない。妹の家で家族が再会出来た時の喜び、あの気強い父が涙を浮かべて喜んでくれた。夫は長女の両手を取ったまま飛び上がり、私は母の膝にすがって泣き崩れたままだった。妹二人はそばでしきりにハンカチで目をぬぐっていた。

内地へ帰ったら一か月ぐらい寝こむかと思った私が、

家族に会えた喜びと、内地のきびしい事情に一時に気分が立ち直って、それからは家族のために重いリュックを肩に食料の買い出しに行く日が続いた。六十過ぎの父も妹も生活のために働いている。いったん岐阜県庁に連絡を済ませた夫は、夫の実家へのあいさつもそこそこの職を求めるのが急務だった。家族八人が妹の家に長く世話になるのも気になって翌年茶屋ヶ坂に出来た引揚寮へ全員移った。夫は硝子工場に働いたり、二、三の職場を転々とした後にギリギリの年令だったが前歴があつたためによくやく元の警察官に戻る事が出来たのはその年の二月だった。父は以前の上司の方のお招きで岐阜市へ帰り、住宅も与えられて家族一同岐阜市へ戻ることが出来た。夫は定年までずっと愛知県へと通い続けた。私も岐阜へ来てからは夜遅くまでミシン仕事に励んでも家計の足しにと働き続けた。家を失った戦災者と、身一つで引揚げて来た私たち家族にとって戦後は長くつらいものでした。

#### 【執筆者の横顔】

美佐子さんは大正四年六月生まれ、名門県立栃木高女卒業、長女であと娘なので養子縁組でむかえたのが夫である。

夫が県警察官を勤務して平穩無事の家庭生活である。ところが、昭和十九年、美佐子さんに、夫から、満州へ行こうと言ひ出した。

拓務省所管の満州開拓青少年義勇軍ハルビン大訓練所で教員一人足らなくなったので、是非行ってくれないかと、県庁から頼まれたとのことである。

美佐子さんは、両親のこと、白木家のことなどを思いめぐらし、当惑した。直ちに賛成はし兼ねていた。しかし、かつて夫から、若い日に教師になるのが夢だったと聴いたことがある、それが美佐子さんの鼓膜に残っていた。父は、お国のためにと男がいったん決心したことだから、やめてくれと言っても無駄だろうと、夫を許してくれた。

夫は九月、内原訓練所で三ヶ月間の受講を修了して、十二月に勇躍渡満しハルビンの大訓練所の教師として赴任した。

昭和二十年一月に夫は迎えに来た。美佐子さんは、母に長女の養育をたのみ、二歳の長男を背に次女を伴い渡満しハルビンの教師官舎に居住することになった。その後たちまち訓練所の先生たちにどんどん召集令状がくる、あれよあれよと驚いているうちに夫にも召集令状がきた。

しかし、八月十五日、天皇陛下の玉音を拜聴しては、万事休すの気持ちから更に再起に燃えるかすかな炎は灯っていた感じをしていた。

美佐子さんの子供も麻疹、百日咳にかり、栄養失調だから治りにくい、いよいよ引揚命令がきた。九月五日ハルビン発、コロ島に着くまでの無蓋車で病弱な子供連れの難行は言語に絶する。乗船して十月四日佐世保に上陸、一千元だけ所持して故郷の岐阜に着き、父も妹も母にあずけた長女も皆無事なので両者感激の涙を流した。

夫は硝子工場や他の職場へと転々として変わり家計を支えていた。美佐子さんも夜おそくまでミシンをふんで生計の足しにした。

昭和二十一年、夫は、かつての前歴のおかげで県警察官に復帰できた。そして二十二年二月間勤務し定年退職。今、夫は少しでもと公共の役に立ちたい気持ちで交通安全指導に奉仕している。

美佐子さんが、引揚者の労苦を表現する言葉並びに文字は、私の辞書にはありません。と涙をためて言われたのは忘れられない。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

## 義勇軍一中隊の帰国

岐阜県 青木 政憲

戦時の激動する最中、この大戦には是が非でも国難を克服して、世界平和の達成を念願して、すべてが国家総動員の状況で対戦されていた。

私たちもその一翼を担わんと志して故郷を遠く離れて祖国のために満州国の建設に満蒙開拓青少年義勇軍

として内地での基礎訓練を経て満州国開拓青年義勇隊員として、ハルビン訓練所に入所し、開拓の精神に燃えて奮闘していたが、戦局も悪化の方向になって、軍需生産の増強の対策に参加する使命のもとに、岐阜第四十四中隊田中中隊は二度にも渡る戦時勤勞挺身隊の派遣をよぎなくされて、奉天市の満州車両株式会社に勤務する立場となったが、荒地の開拓によって国家の建設はもとより、食糧の増産に寄与して、祖国の安定を信念を持って訓練に専念し、固く握りしめた鍬を軍需生産の目的遂行のためにハンマーに持ちかえての活動となったが、始めは慣れない動作で生傷の絶える時がなかった。

作業にもようやくなれ会社の方たちと肩を並べて、平常通りにできるようになって、期待に添えるものと奮起し始めたが、不幸にも敗戦という予期していなかった事態となってしまった。

逆にソ連共産主義国のモスクワ復興五か年計画の目的達成のために強制労働に利用され、四苦八苦の思いで、我に帰って気がつくくと、遠くハルビン訓練所中で